

## 丹波康頼と安倍晴明

——平安時代の医師と陰陽師との関わり・共通点——

権藤 寿昭

ごんどう外科胃腸科クリニック

丹波康頼は、わが国最古の本格的医書『医心方』全三十巻を編集した平安時代の、殿上人・宮廷医であるが、その書は、隋・唐以前の二〇〇以上の文献から撰集された医学全書である。『医心方』の記述は、現代に通じる諸病のほか呪詛や三尸による疾病、鬼邪やもののけの種類別治療法、占星、占相、相愛法、妖怪変怪を避ける術、火遁、水遁、出産の禁忌にも及ぶ。丹波康頼は、後漢の霊帝の曾孫阿知王より数えて八世の孫であり、従五位下（後に従五位上）針博士・医学博士となり、丹波の宿禰の姓を賜った。康頼は永観二年（九八四）11月日に“円融帝に医心方を献上した”とされている。一方の安倍晴明については、言うまでもなく、多くの著書（解説書から、小説に至るまで。）が出版されており、今日のオカルトブームが火付け役となって、映画やドラマでもおなじみである。その伝説の根源の一つが、室町時代から語り継がれてきた説教節『しのだづま』（晴明が、狐の産んだ子とされた。）である。元来、晴明は阿部御主人（635～703、奈良時代）を祖とする名門豪族安倍家の子孫とされている。安倍氏の医術にかかわる記録としては、808年の勅撰医薬処方集『大同類聚方』（百巻）に、安倍氏所伝の処方が40取められているのが現存し、晴明が医術の心得があるというのが察せられる。丹波・安倍両師の著作には、医師・陰陽師それに僧侶や、占い師など共通の読者層が存在し、この点でも両者の仕事、著作間の線引きにおいては、重なる点が少なくなく、かなりの曖昧さが存在する。元来、律令制の下では、技術系の官職として陰陽寮〔陰陽師、天文博士、暦博士などを管轄〕や、典薬寮〔医師、薬師、鍼灸師などを管轄〕が存在し、そこに勤務する者は、在来系の者より渡来系の者が多かった言われている。陰陽師の仕事・活動の論拠とするとところは、中国伝来の陰陽五行説であるが、実は我が国の伝統医学（多くは、中国から伝わった基本学理を元に江戸時代に漢方医学として結実する）の重要な基本原理としても、陰陽五行説は見過ごせない。今回の演題では、この歴史上有名な二人の概説・比較論に加えて、この陰陽五行説の概説も併せて予定している。陰陽説は、人体の生理・病理の説明に深く関わり、五行説は、体内の五臓六腑や精神病理とは密接な理論で結ばれており、（《黄帝内経》など）、わが国の伝統医学の元となった中国医学の基本概念としても、欠かすことができない学説である。こうしたことを踏まえると、医師と陰陽師との前述した関係・共通点も、決して奇妙なこととは言えないと思われる。最後に興味ある事実として、医師・丹波康頼（912～995）と陰陽師・安倍晴明（921～1005）は、生年月日等を見比べても判るように、両者はほぼ同時代に殿上人として生き、二人ともそれぞれ八十四歳、八十五歳と当時としては稀な長寿を全うしており、これからも双方が接触した機会が少なくなかった事が推察される。本演題では、併せて同時代に生きた藤原道長による摂関政治の状況、宗教や迷信によって世の中に蔓延した人々の精神病理に依存した社会不安、そして可能ならば、紫式部・清少納言などが花咲かせた平安時代の文学作品内での疾患・医術の取り扱われ方もあげておきたいと思う。